

〈修士論文要旨〉

山田方谷における誠の観念と理想の社会像

* 川崎貴志

本研究は「山田方谷における誠の観念と理想の社会像」と題し、山田方谷が貫いた「誠」の本体を明らかにしつつ、方谷の思想の全体像に迫ろうとしたものである。

第一章では陽明学への傾倒と経国論の形成を取り上げる。方谷はもと朱子学を学んでいたが、「伝智録」を読み、陽明学へと傾倒する。陽明学は愚者が学ぶと自身の心ばかりを師としてしまい、稽古の功夫を失って私利私欲にはしり、人をはばからなくなるといふ欠点があるが、智者が学ぶと人間性を悟ることが速やかで、道徳を判断することが果敢となり、物事を成し遂げるのに効果を上げるといふ利点を持つと方谷は認識した。そこで陽明学の欠点ばかりを攻め、利点をも排除しようとする朱子学から離れ、陽明学に傾倒していくのである。

方谷は陽明学には「致良知」、「格物」、「誠意」の三つの要点があるとした。その中で誠意を中心に据えた。良知を致すことよって誠意の本体を確認し、格物の実践によつて誠意が実際のものとなるというのが方谷の陽明学観であった。

方谷は「論理財」、「擬対策」を記し、自身の経国論を論じる。その根本となるのは、事の外に立って事の内に屈しないこと、つまり一つ

のことにとられず大局的な観点に立って物事全体を見渡すことであった。方谷は、世の中が困窮しているのは金銭の取り扱いのみとられ、風紀・人心が乱れてしまっているからであり、これを改正しなくてはますます社会が困窮すると考えた。そこで政治・経済がともにはたらく、支えることで国が成り立つことを論じたのであった。

この陽明学観と経国論によつて方谷の意志は実践されていくのである。

第二章では藩政改革における方谷の政策を取り上げる。方谷が仕えた備前松山藩は多額の借財を抱えていた。そこで方谷は藩政改革を推進した。その中では藩札改正、撫育局の設置による専売を行い利益を上げること成功した。それとともに風紀・民政の刷新も行われた。つまり方谷は政治・経済の両面からの改革を行うことよつて藩を建て直そうとしたのであった。

これは賄賂・僭修を排除して、信・義をもつて行われたものであり、領民と藩がともに豊かになることを目指したものであった。つまり方谷は自身の経国論を実況したものであったのである。

第三章では幕政に対する方谷の意見を取り上げる。老中となった藩

主の政治顧問に就任した方谷は、幕政に対する素直な意見を述べるようになる。当時の幕府課題として方谷は財政・軍制の改革を上げる。そのための一政策として代官制の改革を提案する。代官制は幕府経済の根幹を担う職制であり、この見直し、改革を行うことで財政再建を図るとともに、代官を中心とした軍事組織の編制をも図ろうとしたのであった。また参勤交代制の緩和によって諸藩割拠の弊害を生じるところを危惧した方谷は、幕府は天下公共の主意に基づいた政治、天下公共の大道を行うべきであるとした。これは諸藩も自己の私を去って、諸藩一体となった政治であって、幕府でさえもこの道からはずれ、自己のエゴイズムに陥ったならば悪と見なされるものであった。

幕府においてもその経国論は貫かれた。それは私を排除して、諸藩が一体となり日本のために政治を行うという「天下公共の道」を行うという形であられた。これに反した場合は幕府でさえも「私」となったのである。

第四章では方谷の思想の到達点をさぐる。方谷は、気は理に先立って存在する根源的存在であって、理は固定化された存在ではなく気の自己運動によって変化するものであるとした。これはつまり形而上、形而下を貫くものは気であるとする気一元論の立場に立つものである。そこから理を形而上のもの、気を形而下のものとする朱子学の理気二元論を批判するものであり、朱子学から離れ、陽明学へと傾倒することによって初めて可能となった。

方谷は陽明学の本質を「無善無悪」に見出した。この無善無悪は無

私無心であってそれ故に「自然」となる。そして自然であることによって善に至るものであって無善無悪 \parallel 至善になるのである。方谷は善悪の判断基準を仁等の人倫の道ではなく、自然か不自然かにおいた。つまり人々が行う善行善言も作為打算から行われた不自然なものであるならば悪ということになるのであった。

そこで方谷は「誠」であることを求めた。誠は無念無想の中から生じるものであって、故に誠 \parallel 自然 \parallel 至善とした。この私も偽りもない誠を貫くことで人は善となる。そしてまた政治においても誠 \parallel 契矩の道を貫くことでエゴイズムに陥らず皆が一体になれるのであるという考えに至るのである。

このように方谷は誠を貫くことによって本来的自己と政治的価値の一体化を図ろうとした。この誠は意志も作為もない自然なものであり、その無私性によって天地万物と合一するものであった。つまり方谷の思想は天地自然との関連で説かれる天地合一思想であり、天下一体となる社会、また天下とともにある社会を目指したものであったと結論づける。